

# 修復現象の非流暢区間における共起要素の対称性と 「擬似的な話者交替」

—— 日本語自然会話の自己開始自己修復を対象として ——

## Symmetry of Co-occurring Elements in the Disfluency Interval of Repair Phenomena and “Pseudo-Speaker-Alternation”: Targeting Self-Initiation Self-Repair in Japanese Natural Conversation

ホアン・ティ・ラン・ニー\*

HOANG Thi Lan Nhi

### (要旨)

本稿の目的は、日本語自然会話における修復現象の一つである自己開始自己修復を対象とし、その非流暢区間に生起する複数の要素の種類や共起関係を解明することにある。対象は「言い直し」や「言い換え」の現象に限定し、修復プロセスが同じ順番（ターン）内完了するもののみを扱う。分析の結果、以下の主要な知見が得られた。第一に、非流暢区間には1つ以上のポーズが義務的に生起し、これに加えてフィラー（「あの」「え」など）、副詞や疑問詞由来の要素（「こう」「なんか」）、および否定的表現（「いや」「違う」など）が随意的に共起することが明らかになった。第二に、これらの要素が、フィラーの生起位置を中心として、対称的に生起し、中心から離れるほど語彙化の程度が高くなっていることが判明した。このことから、共起位置及び語彙化の程度という2種類の対称性、いわば重層的な対称性構造を仮定できる。第三に、このような非流暢区間の構造的特徴から、フィラーの生起位置が「擬似的な話者交替場所」として機能していることを仮説として提示する。

【キーワード】 修復現象 自己開始自己修復 非流暢区間 対称性 擬似的な話者交替

## 1. はじめに

会話においては、言い直し、言い淀み、言い換えなどの表現が頻繁に観察される。これらの表現は、会話分析の分野において「修復 (Repair)」という概念として研究が進められてきた (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977, Schegloff 2007)。例えば、次の発話を見られたい (記号「↑」は上昇イントネーション、記号「,」はポーズ (pause) をそれぞれ表す)。

- (1) 02009 JM03: 1時間休憩↑  
02010 JM04: そう1時間, そう, 30分2回の, 休憩で

---

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

(1) では、JM04がやっているアルバイトの休憩時間について話している。02010では、「1時間」と発話した後で、「30分2回」と言い直している。このように、話し手が発話中に情報の不足に気づき、その表現を言い直したり言い換えたりする言語現象を修復と呼んでいる。Schegloff, Jefferson & Sacks (1977:361) では、修復を次のように定義している。

(2) An 'organization of repair' operates in conversation, addressed to recurrent problems in speaking, hearing, and understanding.

(会話においては「修復の組織」なるものが働いている。会話において発話産出・聞き取り・理解にかかわる問題が、繰り返し現われる。修復の組織は、この問題に対処すべきものにほかならない。) [シェグロフ・ジェファソン・サックス (2010:157)]

また、修復のプロセスには一定の構造があることも主張されている。Nakatani & Hirschberg (1993) では、言い直し構造をモデル化するための“Repair Interval Model”を提唱している。これは「修復対象区間 (Reparandum Interval)」「非流暢区間 (Disfluency Interval)」「修復区間 (Repair Interval)」から構成されている (Nakatani & Hirschberg 1993:47)。この考え方を (1) に当てはめると、修復される「1時間」の部分を修復対象区間、修復後の「30分2回」の部分を修復区間と設定できる。なお、修復対象区間は「問題源」とも呼ばれ、高木・細田・森田 (2016:185) では「修復の連鎖は会話参加者たちが発話上、聞き取り上、または理解上の問題に志向を示した際に生じる。このように会話参加者が振り返って指し示す、前の発話の中の問題の部分を会話分析では問題源 (trouble source) と呼ぶ。」と定義されている。

さらに、(1) の02010で注目すべきは、修復対象区間と修復区間の間に現れている「、そう、」の部分である。ここではポーズと応答詞「そう」が現れているが、このような非言語的要素やフィラーなどが現れる部分が非流暢区間である<sup>1</sup>。近年では、非流暢区間に焦点を当てた研究が増加しているが、これらの研究の多くは、非流暢区間にどのような要素が含まれるか、またどの要素が最も頻繁に現れるかを明らかにする段階で留まっている。本稿では、この部分を対象とし、出現要素の種類だけでなく、各要素が出現する位置に焦点を当てていく。

なお、本稿で対象とする会話データは、「自己開始自己修復」という修復連鎖を含むものに限定する<sup>2</sup>。すなわち、問題源を含む発話をした者自身によって修復が開始され、同一者が修復を行うというものである。

## 2. 先行研究について

修復という現象は、従来、言い直しや言い淀みといったそれぞれ単独の言語現象として捉えられてきたが、近年の研究では「(非)流暢性 ((Dis)fluency)」という文脈の中で議論されている。(非)流暢性の定義は、研究領域や研究者間で様々であるが、記述言語学の観点からは、「流暢性を仮に「その場に合った内容を、首尾一貫した形で、その言語の文法に沿って、スラスラと話し続けられること」と考え、非流暢性をそこから逸脱と考える」とされている (定延・丸山・遠藤・船橋・林 2024:511)。一方、コーパス言語学の観点からは、非流暢性について、「発話産出過程の「あ

る段階」が、(1) 何らかの要因で阻害されることにより発生する言語現象、および、(2) それを修復するための行為として発生する言語現象」と定義されている（吉田・丸山2024:105）。  
具体的には、定延（2019:72-73）は非流暢な発話を（3）の4種類に大別している。

(3) a ことばの量の不具合

(ア) 重複 例：暴れる馬から落馬する。

(イ) 欠如 例：彼のいいところは優しいです。

(ウ) ループ 例：やっぱりピッチャーが特に一、こう一、去年までやっぱり  
弱かったのがやっぱり……

b ことばの質の不具合

(ア) 取り違え 例：弁慶がな、ギナタを

(イ) 発音の乱れ 例：東京特許きよきよきよきゆ

c ことばの処理サイズの縮小

例：品川駅で、新幹線に、乗り換えて、

d ことばの停滞

(ア) フィラー発出 例：えーと

(イ) 代用 例：ブルなんとかファソ

(ウ) つっかえ (i) とぎれ 例：ブル、  
(ii) 延伸 例：ブルー

また、会話分析の研究においては、非流暢な発話に（4）のような言語現象や様々な要素（書き起こし記号で表されるもの）が現れることも指摘されている（定延・丸山・遠藤・船橋・林2024:515-516）。

(4) 1: カットオフ（産出中の語を途中でとめる） - (例：そー それって)

2: 延伸（音を伸ばす）:(例 う :: ん)

3: フィラー

3-1: 「あー」等の母音由来フィラー

3-2: 「あのー」「そのー」等の指示詞由来フィラー

3-3: 「まあ」「もう」等の副詞由来フィラー

3-4: 「なんていうのかな」等の自問発話

4: 沈黙 ごく短いポーズは (.), 長いポーズは秒数を明示 (例: あの (0.5) それは)

5: 息 (吸気音, 呼気, 咳ばらいなど) .h h

6: 繰り返し

7: 舌打ち (英語や中国語会話において) tch, TSK

以上のように、非流暢性と言っても、多種多様な言語現象が見られ、またそこに生起する要素も様々である。これらの言語現象を話者が問題源として捉え、何らかの対処を行った場合、その

行為を修復と呼んでいるのである。そのため、多種多様な言語現象を一括して研究することは難しく、自ずと研究対象を絞っていくことになる。

修復現象の非流暢区間に生起する要素に関する主たる研究には、高木・細田・森田（2016）、杉崎（2020）、甲田（2024）などがあるが、これらの研究も対象を限定したものとなっている。

まず、高木・細田・森田（2016:218-223）では、日本語特有の修復として、非流暢区間に生起する「ていうか」や指示代名詞「あれ」の使用、及び格助詞を含んだ修復について記述している。例えば、高木・細田・森田（2016:202）には（5）が挙げられている<sup>3</sup>。

(5) [Haru-Taka: 36: 09-10]

01 タカ： アメリカ行ったことない. っていうか住んだことない

「っていうか」の機能については4.4節に引用しているが、ここでの問題は、記号.（ピリオド）についての言及がないことである。非流暢区間には、言語的要素だけでなく、非言語的要素であるポーズや笑いなども生起するため、これらすべての要素を観察すべきである。

また、高木・細田・森田（2016:202）では、（6）のようなデータも挙げている<sup>4</sup>。

(6) [NI: 23: 552-560]

01 ナエ： う:::ん（.）とね:::こないだもグアムにいって:

02 イヨ： う:ん

03 ナエ： それでそれぞれ違う島行って:

04 イヨ： うん.

05 ナエ： それぞれ3月の終わりに（.）行ってた=

06 イヨ： =うん=

07 ナエ： =あつ2月の終わりだ=

08 イヨ： =行ってたの

ここでは、05行の「3月の終わり」が修復対象区間（問題源）、07行目の「2月の終わりだ」が修復区間となっている。すなわち、同じ順番（ターン（turn））内で修復が行われているのではなく、修復対象区間が含まれる順番から数えて3番目の順番内で修復が完了しているのである。このように、修復対象区間、非流暢区間、修復区間が離れている修復現象もあるが、同じ順番内で修復が完了する場合とは、生起する要素も異なれば、話者交替も存在し、修復現象の組織そのものが異なっている<sup>5</sup>。そのため、別個に扱うべきであろう。

次に、杉崎（2020）では、日本語の日常会話における「なんか」という表現が修復の際に果たす役割について記述している。まず、「なんか」を使った修復を、その目的に応じて、「聞き手志向型」と「話し手志向型」に分類している。前者は、話し手が聞き手の理解を助けるために追加情報を提供する場合を指し、「なんか」は聞き手が理解するのに必要な背景情報を補足するマーカーとして機能している。一方、後者は、話し手が自分の伝えたい内容をより正確に表現するために不可欠な情報を追加する場合を指し、話し手自身の思考整理を助けながら、最も適切な表現

を探る過程を示している。その結果、「なんか」が単なる言い淀みではなく、会話参加者同士が協力して相互理解を達成するための重要な言語手段であると結論づけている。

しかし、ここでも、「なんか」以外の要素に関する記述は見られない。例えば、杉崎（2020: 20）には（7）のようなデータが見られる<sup>6</sup>。

- (7) A: いろいろともめごとが、もめごとっていうか、なんか、  
後継ぎのことでもめたらしくって  
 B: うん (J-7)

(7) では、「なんか」が生起していることは分かるが、記号「,」が何を意味しているかについては書かれていない。この読点はおそらくポーズであろうが、これについての記述はなく、注目されていない。

次に、甲田（2024）では、日本語日常会話の修復現象を対象とし、そこに生起する談話標識 (discourse marker) がどのように用いられているかについて予備的考察を行っている。ここでは、「接続詞、感動詞に限定せず、談話内で一定の定型表現として使われ、独立した音調を持つ語類」を談話標識と呼んでいる。具体的には、非流暢性区間に現れた談話標識として、(8) を挙げている（甲田2024:103）。

- (8) あ／あっ／あっと／あの／あれじゃん／うん／うんまあ／え:まあ／こう／じゃ／  
 じゃない／じゃないや／じゃないん (.) なんだっけ／その／っていうか／ってい  
 うかあの／ってか／って言うかさ／てか／でもやっぱ／なに／なんか／なんだろ／  
 まあ／ん?／

しかし、ここでは、どのような談話標識がどのような機能を持つときに、量的にどの程度の割合で生起するのかといった問題を扱っているだけである。そのため、(8) の「っていうかあの」が一つの要素なのかどうかといった分析にまでは踏み込んでいない。

また、(9) のように、提示されているデータが修復現象の箇所だけであるため、前後の会話不明である（甲田2024:102）。

- (9) 道路側 (.) あっ (.) 道路側の階段

さらに、(9) では、「あっ」の直前・直後に記号(.) (0.2秒に満たない短い間合い) が観察できるが、これに関する記述は見られない。すなわち、非流暢区間に言語的要素が一つだけしか現れない場合のみに注目しているのである。

以上の先行研究から分かるように、そもそも非流暢区間を対象とした研究はほとんどなく、あつたとしても言語的要素だけを扱っている。非流暢区間は非流暢であるだけに、言語的要素だけではなく、ポーズなどの非言語的要素の詳細な分析が必要である。さらに、非流暢区間には、複数の非言語的要素が生起している場合が多いため、それらの互いの関係にも注目すべきである。

そこで、本稿では、研究対象を次のように設定する。

- 様々な種類の修復現象の中で、「言い直し」や「言い換え」という現象に絞る。
- 自己開始自己修復のパターンを扱う。
- 修復現象のプロセスが、同じ順番内で完了するもののみを扱う。
- ポーズやフィラーなどの非言語的要素が複数共起する場合を対象とする。

### 3. 会話調査について

本研究で使用する会話データは、筆者が2024年4月に収集した日本語の自然会話である。参加者は、いずれも日本語を母語とする男子学生4人と女子学生6人で、それぞれ同性のペア（計5組）に分かれて会話を行った。各ペアはいずれも友人関係にある。各ペアには30分程度自由に会話をしてもらい、そのすべての会話を、iPhone 11のアプリ「ボイスメモ」を用いて録音した。筆者は、いずれのペアの会話にも同席していない。合計で5本の会話データ（約150分）を収集した。その内訳は【表1】（筆者作成）の通りである。

【表1】 会話調査の概要

会話データ番号	会話ペア	会話調査時間
01	JF01～JF02	31分11秒
02	JM03～JM04	30分00秒
03	JF05～JF06	28分58秒
04	JM07～JM08	29分23秒
05	JF09～JF10	29分41秒

【表1】の「会話ペア」欄にある通し番号の次にあるアルファベット・数字（ここでは「JF05」「JF06」）はそれぞれ「発話者」を表す。記号Jは日本語母語話者であること、記号M, Fは性別（M=男性, F=女性）をそれぞれ表す。

本稿であげる会話データを次のように表記する。

03449 JF05：確かに、なんか、あれかんなんかあの、こう鳥って感じがするね  
03450 JF06：うん

最初の5桁の数字（ここでは「03449」「03450」）は通し番号である。このうち、最初の2桁（ここでは「03」）は「会話データ番号」であり、次の3桁（ここでは「449」「450」）は発話の「通し番号」である。一方の話者の発話が始まり、他方の話者に話者交替が起こるまでの発話全体を1と数えている。通し番号の次に、発話者の記号を記している。この次に、発話データを書いている。発話のトランスクリプトの表記方法は、以下の通りである。

- [ ] 二人の発話が重なっている部分を示す。
- <#> 聞き取り不能の部分を示し、#の数で聞き取れなかった部分の長さを示す。
- 氏名や地名などの固有名詞を示す。
- ↑ 上昇イントネーションを示す。
- (hh) 笑いを示す。
- , 0.5秒以上1.0秒未満はポーズ (pause) とする。
- 《沈黙 秒数》 1秒以上の「間 (silence)」は、沈黙として、その秒数を記す。
- 《文字》 筆者による様々な種類の注釈・説明を示す。

また、説明時の視認性を高めるために、発話データ上に、次の下線を使用して、Repair Interval Modelの3区間を明示する（記号\*\*\*は発話データを表す）。

- \*\*\* 修復対象区間を示す。
- \*\*\* 非流暢区間を示す。
- \*\*\* 修復区間を示す。

## 4. 分析

本節では、自己開始自己修復が起こるパターンを、「フィラーとポーズ」、「応答詞とポーズ」、「なに」とポーズ、「否定的表現とポーズ」の4種類に分類して観察する。ここでは、非流暢区間にどのような要素が、どのような順序で現れるのかについて分析していく。

### 4.1. フィラーとポーズ

本節では、非流暢区間にフィラーとポーズという2つの要素が現れる会話データを取り上げる。まず、会話データ (10) を示す。

- (10)
- 03287 JF05: もう小学生出ないと思ってた
  - 03288 JF06: お母さん、また、また小学校の娘が
  - 03289 JF05: (hh)
  - 03290 JF06: (hh) また名前変えて
  - 03291 JF05: なんかあれらしい、あの一参観日がちょっと気まずらしい
  - 03292 JF06: へえ
  - 03293 JF05: 周りよりちょっと [年齢] が高いからさ
  - 03294 JF06: [ああ]
  - 03295 JF05: おばあちゃん? みたいな (hh)
  - 03296 JF06: (hh) そんなに?
  - 03297 JF05: そう

(10) の発話03291では、話者JF05が「あれらしい」と発話した直後に、修復現象が現れている。ここでは、修復対象区間となる「あれらしい」から始まり、その後、非流暢区間に入る。非流暢区間では、「,」（ポーズ）と「あの一」（フィラー）がこの順序で現れている。最後に、話者JF05は「あれらしい」を「参観日がちょっと気まずいらしい」に修復し、修復を完了させている。そこで、非流暢区間に現れる要素の統語的順序を、(11)のように定式化しておく（以下、定式化したパターンにおける記号pはポーズ、記号fはフィラーをそれぞれ表す）。

(11) p-f（あの一）

次に、会話データ（12）を挙げる。

(12)

- 03451 JF05：《沈黙4秒》オーストラリア，オーストラリア結構あれだね地域の、  
分け方が結構はっきりしとんかね  
03452 JF06：でもあれでしょあの一、ほぼ自然でしょ、こっちは  
03453 JF05：あ、そうなんだ

(12) では、二人がオーストラリアについて話している。JF05は、オーストラリアが「ほぼ自然でしょ」というが、その過程で発話03452に修復表現が現れている。修復対象区間となる「あれでしょ」から始まり、「あの一」（フィラー）、そして「,」（ポーズ）の順で非流暢区間が現れる。最後に「ほぼ自然でしょ」と修復されている。ここでは、ポーズとフィラーが（11）とは逆の統語的順序で現れているため、（12）の非流暢区間を次のように定式化しておく。

(13) f（あの一）-p

次に、会話データ（14）を挙げる。

(14)

- 03448 JF06：オーストラリアって言ったらオーストラリアだけって感じがするけん、なんかもうなんもそうやってさ、他の国みたいに行きたいけど、お金がね、しかもなんか下の方にあるしね、どこにも近くない気がする  
03449 JF05：確かに、なんか、あれかんなんかあの一、こう鳥って感じがするね  
03450 JF06：うん

(14)の会話では、二人がオーストラリアについて話している。JF05は、オーストラリアのイメージを伝えようとしているが、その過程で発話03449に修復現象が現れている。修復対象区間となる「あれかん」から始まり、「なんか」（フィラー）、「あの一」（フィラー）、「,」（ポーズ）、「こう」（フィラー）の順で非流暢区間が現れる<sup>7</sup>。最後に「鳥って感じがする」と修復されている。そこ

で、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(15) f (なんか) -f (あのー) -p-f (こう)

次に、会話データ (16) を示す。

(16)

02218 JM04: (hh) 彼女さんがな

02219 JM03: いいね

02220 JM04: あれだから、あのー、土日祝休みやから

02221 JM03: あー

02222 JM04: そうそう

(16) では、JM04は恋人の休みの日について話している。発話02220に修復現象が現れている。修復対象区間となる「あれだから」から始まり、「,」(ポーズ), 「あのー」(フィラー), 「,」(ポーズ) の順で非流暢区間が現れる。最後に「土日祝休みやから」と修復されている。そこで、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(17) p-f (あのー) -p

次に、(18) を挙げる。

(18)

02503 JM03: 日本海岸側に逃げましょう、秋田県とか北海道は無敵

02504 JM04: (hh)

02505 JM03: たぶん、地震心配だわ、南海トラフ

02506 JM04: はいはい

02507 JM03: 《沈黙3秒》心配しすぎても

02508 JM04: うん、でもこのえ、この前の地震揺れ感じた↑

02509 JM03: なんかあったっけ↑

02510 JM04: え、この前あの、高知県で震度5強かな↑6弱か

02511 JM03: ああいや、すー、なんか、感じたような感じじゃないよ

(18) では二人が最近の地震について話している。発話02508に修復現象が現れている。修復対象区間となる「この」から始まり、「え」(フィラー), 「,」(ポーズ) の順で非流暢区間が現れる。最後に「この前」と修復されている。そこで、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(19) f (え) -p

#### 4.2. 応答詞とポーズ

前節ではポーズがフィラーと共に共起する修復現象を観察したが、本節では、ポーズと応答詞が共起する修復現象について記述する。

まず、会話データ (20) が挙げられる。

(20)

- 02003 JM03: バイト何時間だった今日  
02004 JM04: 今日今日バイト11時, からやな  
02005 JM03: 11時から↑  
02006 JM04: 11時, から18時  
02007 JM03: 7時間↑  
02008 JM04: そう, 7時間  
02009 JM03: 1時間休憩?  
02010 JM04: そう1時間, そう, 30分2回の, 休憩で  
02011 JM03: ああ

(20) では、二人はJM04のバイトの時間について話している。発話02010では、「1時間」の代わりに「30分2回」という詳しい情報を加えるため、修復現象が起こっている。ここでは、最初に修復対象区間となる「1時間」から始まり、その後、非流暢区間では、「,」（ポーズ）、「そう」（応答詞）、「,」（ポーズ）が現れている。最後に、話者は「30分2回」と修復し、修復を完了させている。そこで、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(21) p-応答詞（そう）-p

#### 4.3. 「なに」とポーズ

本節では、「なに」とポーズが共起するパターンを観察する。まず、会話データ (22) を示す。

(22)

- 05081 JF09: 漫画を読みたいと思って、初めて漫画を読んだのが、高校生 (hh)  
05082 JF10: え、図書館にあったってこと漫画が  
05083 JF09: うん、なんかとしょ, なに, としょ、なに、本屋さん  
05084 JF10: はいはい

(22) ではJF09が子供の頃、図書館ではなく本屋さんの漫画を読んだことについて話している。発話05083において修復現象が観察される。まず、修復対象区間となる「としょ」から始まり、その後非流暢区間として「,」（ポーズ）、「なに」、「,」（ポーズ）が続いている。次に、「としょ」が発話され、これが修復区間となって、修復が一旦完了している。しかし、その後、この「としょ」

が修復対象区間となり、同様の非流暢区間の要素を経て、「本屋さん」という修復区間にたどり着いている。ここで、最終的に修復が完了している。非流暢区間だけを見る限りでは、前半も後半も同じパターンである。すなわち、非流暢区間を (23) のように定式化できる。

(23) p-なに-p

ただ、現時点までに挙げた非流暢区間のパターンと大きく異なる点は、パターン (23) が反復可能であるということである。1回の修復プロセスによって、修復が完了するとは言えないことから、そのプロセスが反復されることは当然予測されるが、重要な点は、この事例においても、非流暢区間のパターンが規則性を示していたということである。もちろん、この反復可能性については、可能な要素やパターン、及び回数など、解決すべき課題は残る。

また、もう1点問題となることは、非流暢区間に現れている「なに」である。これは、すでに疑問詞の意味を持っていないのではないだろうか。(23) を (17) のフィルター「あのー」と比較しても分かるように、いずれもポーズ間に挟まれていることから、機能的にはフィルターに近いものになっていると考えられるだろう<sup>8</sup>。そうすると、(23) を (24) のように再定式化しておいても問題ないだろう。

(24) p-f(なに) -p

次に、会話データ (25) を示す。

(25)

05539 JF09: え、帰らないの↑福岡

05540 JF10: 帰ってもよかったんやけど

05541 JF09: おーおーおー

05542 JF10: なんか、ゴールデンウィークは、あれやった、あのーなに、バイトとか

05543 JF09: うんうん

(25) では、JF10が実家に帰らない理由について話している。そのとき、発話05542で修復現象が起こっている。最初に修復対象区間となる「あれやった」から始まり、その後、非流暢区間では「、」（ポーズ）、「あのー」（フィルター）、「なに」（フィルター）、「、」（ポーズ）が現れている。最後に、JF10は「バイトとか」と修復し、修復を完了させている。そこで、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(26) p-f(あのー) -f(なに) -p

#### 4.4. 否定的表現とポーズ

本節では、否定的表現とポーズが共起する会話データを観察する。ここで言う否定的表現とは、

その直前にある要素をキャンセルして、その直後にある要素に言い換えるためのツールである。  
まず、会話データ (27) を示す。

(27)

- 02653 JM03: 大学卒業してないから《沈黙6秒》あれ、俺の知り合い  
02654 JM04: うん  
02655 JM03: 俺の知り合いっていうか、仲のいい人  
02656 JM04: うん  
02657 JM03: 誰も就活してない

(27) の02655では、JM03が自分の「知り合い」の代わりに「仲のいい人」に修復している。最初に修復対象区間となる「俺の知り合い」から始まり、その後、非流暢区間では「っていうか」(否定的表現)と「,」(ポーズ)が現れている。最後に、「仲のいい人」と修復して修復を完了させている。

「っていうか」については、高木・細田・森田(2016:218)によると、「婉曲的な修復開始に使われることがあり、問題源の発話を必ずしも否定せずに修復候補をもう1つの可能性があるかのよう<sup>9</sup>に提示する。しかしながら実際には明らかな置き換えや訂正の場合にも用いられることがある。」と指摘している<sup>9</sup>。本稿では、他のデータとの混同を避けるために、暫定的に「否定的表現」と呼んでおく。

(27) に生じた非流暢区間を (28) のように定式化しておく。

(28) 否定的表現 (っていうか) -p

次の会話データ (29) も同じパターンである<sup>10</sup>。

(29)

- 04379 JM08: だから絶対に書道やなど  
04380 JM07: 書道か  
04381 JM08: 書道とかボイストレとか、そっちなんかと歌、ボイストレ、普通の発声練習  
04382 JM07: あー  
04383 JM08: そっち系すんな、習い事やと  
04384 JM07: なんかさ、書道ってさ、今思えばっていうスポーツスポーツっていうか、その種類の習い事について、なんかその時楽しいって思うのかなって思わんと思う  
04385 JM08: 続けられんよ、全く思わんと思う  
04386 JM07: なんかその時楽しいって思うなおかつその意味があるっていうのはあるかな  
04387 JM08: そーーーそれはないよね、やっぱそれになったらスポーツ系になるのかな、

先週確かに俺役立ったかな体操は、体操は役立ったもん結構

04388 JM07：うん

(29) では二人が小学生の時の習い事について話している。ここでは、発話04384で修復現象が起こっている。最初に修復対象区間となる「スポーツ」から始まり、その後、非流暢区間では「っていうか」(否定的表現)と「,」(ポーズ)が現れている。最後に、「その種類の習いこと」と修復して、修復を完了させている。従って、非流暢区間の定式化は(28)と同一である。

次に、会話データ(30)を示す。

(30)

03596 JF06： そうそうそう、え、いいね、家、私もシェアハウス住みたかったけど、4年契約↑4年契約やね、やけん

03597 JF05： あ、そっかそっかそっか、シェアハウス、あれだろうな、遠いんだよな家から、あいや学校から

03598 JF06： あそうね、それはそうね

(30) の会話では、二人が学校からシェアハウスまでの距離について話している。最初に修復対象区間となる「家から」から始まり、その後、非流暢区間に入っている。この区間では「,」(ポーズ)、「あ」(フィラー)、「いや」(否定的表現)が現れている。最後に、話者は「学校から」と修復し、修復を完了させている。

非流暢区間にある「いや」は、否定の応答詞としても使用されるが、ここではフィラーに近い機能を持っているのではないだろうか。ただ、現時点では応答詞やフィラーとはせず、否定表現と捉えておく。

従って、非流暢区間を次のように定式化しておく。

(31) p-f(あ) - 否定的表現(いや)

次に、会話データ(32)を挙げる。

(32)

03274 JF06： あ、そんなに空いとん?

03275 JF05： うん、だって一番

03276 JF06： もう一個下の、下 [から出てるから]

03277 JF05： [8つ8つ ] 空いてる、今

03278 JF06： ええ

03279 JF05： 今一番下の子は今中2、違う中3

03280 JF06： へえ、中3から小1↑

03281 JF05： そうそう、結構空いとんやろ↑

03282 JF06: うん

(32) では、JF05が自分の姉妹について話している。発話03279で修復現象が現れている。最初に修復対象区間となる「中2」と言った後、非流暢区間に入る。この区間では「,」（ポーズ）と「違う」（否定的表現）が現れる。その後、JF05は「中3」と修復し、修復を完了させている。

非流暢区間にある「違う」は、否定的表現ではあるが、本来動詞という自立語である。指示詞や副詞がフィルター化している現象は見られるが、動詞のフィルター化については議論の余地がある。ただ、(32)の「いや」と同様に、否定の意味を持つ語が修復現象に現れていることから、機能的にはフィルターとしての役割を果たしているのかもしれない。従って、本稿では、「違う」も否定的表現と捉えることにする。

ここでの非流暢区間を(33)のように定式化しておく。

(33) p-否定的表現（違う）

## 5. まとめ

第4節では、自己開始自己修復における非流暢区間の生起要素の種類及びその統語的順序を分析した。非流暢区間のパターンを【表2】（筆者作成）にまとめてみる。

【表2】自己開始自己修復における非流暢区間のパターン

分類	パターン
フィルター・ポーズ	(11) p-f (あの一) (13) f (あの一) -p (15) f (なんか) -f (あの一) -p-f (こう) (17) p-f (あの一) -p (19) f (え) -p
応答詞・ポーズ	(21) p-応答詞 (そう) -p
「なに」・ポーズ	(24) p-f (なに) -p (26) p-f (あの一) -f(なに) -p
否定的表現・ポーズ	(28) 否定的表現 (っていうか) -p (31) p-f (あ) -否定的表現 (いや) (33) p-否定的表現 (違う)

【表2】のパターンには共通する要素があるため、以下、生起位置の順序によってまとめてみる。まず(11)では、pが先に現れ、その直後にf(あの一)が現れる。また(13)では、f(あの一)が先に現れ、その直後にpが現れる。f(あの一)が共通して生起すること、そしてpの生起位置を考慮すると、(11)(13)を「p-f(あの一)-p」のように統合することができる。ただし、(11)のpは(13)には生起せず、また(13)のpも(11)には生起しないことから、いずれのpも随機的(optional)な要素ということになる。次に、(15)にも「f(あの一)-p」があることから、さらに「p-f(なんか)-f(あの一)-p-f(こう)」と統合することができる。この時

点では、最初のpとf（なんか）の順序は決まっていない。また、f（なんか）は、(11) (13)には生起しないことから、随意的な要素である。次に(17)であるが、これはすでに「p-f（なんか）-f（あの一）-p-f（こう）」に組み込まれている。次に、(19)にもfとpがあることから、「p-f（なんか）-f（あの一）-p-f（こう）」に(19)を統合すると、「p-f（なんか）-f（あの一、え）-p-f（こう）」ができる。ここでは、(19)のf（え）をf（あの一）と同じ位置にしているが、これはf（なんか）が疑問詞由来のフィラーであり、元々からフィラーであるf（え）やf（あの一）とは性質が異なると判断したからである。

(21)のような応答詞が生起するパターンは、(21)のみであるため、現時点ではこのまま扱う。(24) (26)では、f（なに）が共通要素であり、ほぼ同じ位置に生起していることから、「p-f（あの一）-f（なに）-p」と統合することができる。なお、f（なに）は、(17)から随意的な要素であると考えられる。

(28) (31) (33)では、「っていうか」「いや」「違う」をすべて否定的表現というカテゴリーにしている。そのため、「否定的表現（っていうか）-p-f（あ）-否定的表現（いや、違う）」というように統合することができる。この否定的表現、そしてf（あ）も随意的な要素である。以上のように、類似するパターンを統合すると、(34)のようにまとめることができる。

- (34) a. p-f（なんか）-f（あの一、え）-p-f（こう）  
 b. p-応答詞（そう）-p  
 c. p-f（あの一）-f（なに）-p  
 d. 否定的表現（っていうか）-p-f（あ）-否定的表現（いや、違う）

会話データの量が不足しているため、(34)の統語的順序は暫定的な箇所もある。例えば、(34a)の「え」は、【表2】(19)を見ると、ポーズの前に位置するということが分からない。「あの一」との順序関係は不明である。同様に、応答詞（そう）、フィラー（あ）、否定的表現（いや、違う）も統語的順序が確定しない。統語的順序を確定するためには、どのような方法を利用すればよいだろうか。

そこで、フィラーなどの感動詞類が複数共起したときの統語的順序を扱った劉・有元（2022）の考え方を参照してみる。劉・有元（2022）では、日本語の会話データに現れる二連鎖感動詞類（2つの異なる感動詞類が連続して共起するもの）を対象とし、その種類や統語的順序を認知的な観点から分析したものである。例えば、「あ、そー」という発話があった場合、「あ」と「そー」の箇所に現れる感動詞類の種類がそれぞれ決まっており、またそれらの統語的順序も決まっていると主張している。劉・有元（2022:153）では、(35)のように感動詞類をA群～D群の4種類に分類し、この順序で統語的に共起すると仮定している。

- (35) a. A群（「あ」「え」など）：発話時に、発話者が直前の命題に対するアクセスを行う。  
 b. B群（「えー」「あー」など）：発話時に、発話者が直前の命題に対する真偽の検討を行う。  
 c. C群（「まあ」など）：発話時に、発話者が直前の命題に対して真偽の中途半端な判断を行う（判断を保留する、または判断への関与を拒否する）。

d. D群（「そう」「うん」「はい」など）：発話時に、発話者が真偽判断を確定する。

ここで注目したい点は、4種類の群に属している感動詞類がそれぞれ同じような機能を持っているものであるということである。例えば、D群はいわゆる応答詞が含まれている。

本稿でも、劉・有元（2022）と同様の考え方を導入し、同様の機能を持っているものを1つのカテゴリーとしてまとめ、(34)を再定式化してみる。(36)のようになる。

(36) 否定的表現（っていうか）-p-f（なんか）-f（あの一/え、あ/そう）  
-f（なに）-p-f（こう）-否定的表現（いや、違う）

(36) から分かることは3点ある。

まず1点目は、f（あの一/え、あ/そう）には、劉・有元（2022）で仮定した(35)の群がほぼ含まれている可能性があるということである。しかし、この内部の統語的順序については、現時点ではデータ不足のため不明である。また、f（こう）は2番目のpの直後に置いているが、他のフィルターとの関係や否定的表現（いや、ちがう）との統語的順序に関しては今後の検討が必要である。

2点目は、(36)はf（あの一/え、あ/そう）を中心としてほぼ対称性（symmetry）を成しているということである。厳密に言えば、f（こう）を除いて対称性を成しているのである。f（こう）が2番目のポーズの直後に生起するデータがあれば、完全な対称性を成すが、現時点では得られていない。

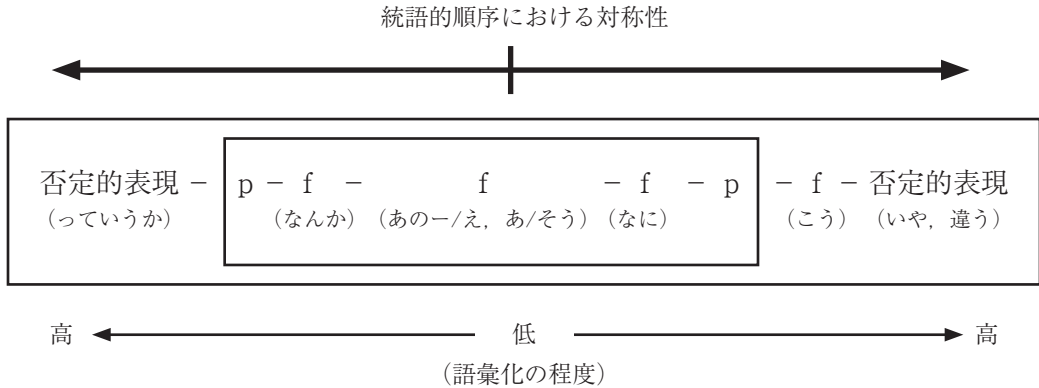
もちろん、実際の会話データにおいて、対称的な統語的順序を成しているのは、(17),(21),(24)だけである。すなわち、非流暢区間に現れる様々な感動詞類の生起は、そもそも随意的なのである。修復現象においては、感動詞類は現れても現れなくてもよい。それにもかかわらず、なぜこれらの要素が生起する統語的順序に対称性が見られるのだろうか。例えば、一つの考えとして、以下のような仕組みを想定できる。対称性は空箱（empty box）のようなもので、話者交替場所に、これらの要素が入ることのできる空箱が複数並んでいる。これらの空箱には、ラベル（label）やインデックス（index）のようなものが付けられていて、どのような要素がどの空箱に入ることができるかが決まっている。それらの空箱の中に特定の要素が入ると、対称性が形成されていくという仕組みである。もちろん、多くの要素が入れば、より対称的になるというわけでない。一つでも、ゼロでもよい。つまり、対称性は空箱が持っている属性と仮定するのである<sup>11</sup>。

ただ、ここで問題となることは、ポーズの存在である。本稿の会話データでは、すべてのパターンで1つ以上のポーズが共起している。このことから考えると、1つ以上のポーズの存在が修復現象の必要条件なのかもしれない。生起が義務的（obligatory）なポーズについては、今後の検討課題としたい。

3点目は、この対称性において、中心の外側に位置する要素ほど語彙化（lexicalization）しているということである<sup>12</sup>。例えば、中心であるf（あの一/え、あ/そう）の両側に位置するf（なんか）及びf（なに）は、いずれも疑問詞由来の要素であり、それゆえ中心部分よりも語彙的である。さらに、これらの外側には、ポーズを挟んで、否定的表現（っていうか）、f（こう）、否定的表現（いや、違う）が位置している。これらは、第4節で議論したように、語彙的であるため、

フィルターかどうかの判断を保留していたものである。

以上のことから、この対称性は、単なる対称性ではなく、重層的な (multilayered) 構造を成していると言えるかもしれない。キーとなる要素はポーズである。2つのポーズを境界として、内側に位置する要素と外側に位置する要素とは、その語彙的な度合いが大きく異なっているように見える。図式化すると、【図1】(筆者作成)のようになる。



【図1】非流暢区間における重層的な対称構造

【図1】が示すように、2つのポーズに挟まれた箇所にある要素は、いわゆる感動詞類が生起している。一方、2つのポーズの外側に位置する要素は、内側に位置する要素よりも相対的に語彙化の程度が高いものであり、感動詞類ではない。従って、全体的には、非流暢区間に現れる要素は2層になっており、中心であるf(あのー/え, あ/そう)から外側に行けば行くほど、語彙化の程度は高くなっている。語彙化の程度から見ても、対称的になっていると言えよう<sup>13</sup>。

それでは、このような重層的な対称性は何を意味しているのだろうか。また、ポーズは対称性においてどのような役割を担っているのだろうか。

何らかの言語現象が起こる際に、共起する感動詞類の間に対称性が観察されるということを扱った研究には、管見の限り、NGUYEN THI HA (2025) しかない<sup>14</sup>。この研究では、日本語とベトナム語の自然会話を対象とし、共同発話の一種である「引き継ぎ」現象に生起する感動詞類の種類と統語的順序を記述している。その結果、引き継ぎが起こる話者交替場所において、(37)のような感動詞類の対称性が仮定されている (NGUYEN THI HA 2025:240)<sup>15</sup>。

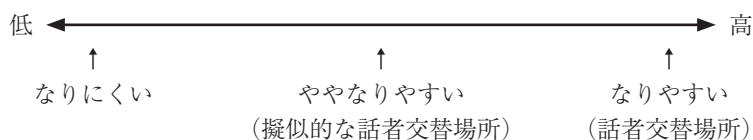
(37) 話者交替を中心にした挿入要素の統語的生起順序 【..感 p 感 (hh) | (hh) 感 p 感..】とその対称性は、引き継ぎが起こるための普遍的な規則性として機能している。

すなわち、ここから (38) のような仮説が立てられる。

(38) 仮説：感動詞類などの要素の対称性は、話者交替場所を中心としたところに生じやすい。

この仮説を、修復現象の非流暢区間に適用してみると、対称性の中心はf（あの一/え、あ/そう）であることから、これが話者交替場所に相当することになる。しかし、実際には、ここで話者交替が起こっているわけではない。ここで起こっていることは、語彙化の程度が相対的に最も低い感動詞類（非語彙的感動詞類（田窪2005））が生起しているだけである。それでは、なぜここに対称性が観察されるのであろうか。

そこで、f（あの一/え、あ/そう）のような非語彙的感動詞類は、話者交替場所と類似の機能を持っていると考えられないだろうか。つまり、非語彙的感動詞類が生起する場所として「擬似的な話者交替場所（pseudo-TRP）」を仮定してみる<sup>16</sup>。擬似的な話者交替場所は、従来の話者交替場所と連続的な関係があり、“話者交替場所へのなりやすさ”の点で、同じスケールの上に位置していると考えられる。そのスケールを図式化すると、【図2】（筆者作成）のようになる。



【図2】“話者交替場所へのなりやすさ”のスケール

【図2】が示すことは、以下の通りである。話者交替場所になりやすい（高スケールの）ところでは、実際に話者交替が起こっている。一方で、話者交替場所になりにくい（低スケールの）ところでは、実際の話者交替は起こらない。すなわち、話者が連続してしゃべっているような場合には、どこにも話者交替は起こらない。しかし、それらスケールの中間が示していることは、話者交替場所にはややなりやすいが、実際の話者交替は起こっていない箇所である。ここでは、感動詞類など別の要素をツールとして使用することによって、あたかも話者交替場所であるかのような“架空の場所”を作り出しているのである。擬似的な話者交替場所とは、このような場所を指しているのである。

以上のような仮説を立てると、「f（あの一/え、あ/そう）の位置では、ある種の話者交替（擬似的な話者交替（pseudo-speaker-alternation））が起こっている」と言うことができるだろう。話者の視点から言うと、当該の話者は、その位置で、あたかも別話者に交替したかのように、新たな発話を開始しているということになるのではなかろうか<sup>17</sup>。

## 6. おわりに

本稿では、日本語自然会話に見られる自己開始自己修復という修復現象を対象とし、その非流暢区間に生起する要素の種類と分布を統語的観点から分析した。その結果、次のような仮説を立てた。

- 非流暢区間には、1つ以上のポーズが義務的に生起する。また、感動詞類だけでなく、副詞や疑問詞由来の要素、否定表現も随意的に生起する。

- 非流暢区間は、重層的な対称性の構造を成している。第一層（内側の層）では、f（あのー/え、あ/そう）といった感動詞類を中心とした対称性であり、その最も外側の両端には、ポーズが位置する。第二層は、第一層の外側に位置する。ここでは、f（あのー/え、あ/そう）を中心として、語彙化の程度が外側に行くほど高くなるという対称性を成している。
- 重層的な対称性が、いずれもf（あのー/え、あ/そう）を中心としていることから、これを「擬似的な話者交替場所」とであると仮定する。自然会話において、話者は、従来言われている話者交替場所ですら実際に話者交替が行われるだけでなく、このような擬似的な話者交替場所においても、擬似的な話者交替（あたかも話者交替が行われたかのような話者交替）が行われる。なお、擬似的な話者交替（場所）と話者交替（場所）とは、連続的な関係にあるだろう。

言うまでもなく、上記の仮説は、本稿で扱った会話データから設定したものであり、会話データをさらに増やすことによって、更新されるべきものである。

また、本稿で扱った非流暢区間のデータは、非常に限定されたものであった。言い直しや言い換え以外の修復現象のデータ、あるいは修復のプロセスが同じ順番内を超える修復現象では、どのような種類の要素が、どのように共起するのか、検討が必要である。

さらに、言語普遍性についても考察すべきである。NGUYEN THI HA (2025) では、ベトナム語の「引き継ぎ」現象において、話者交替時を中心とした非言語的要素の対称性があるという仮説が提示されている。また、フランス語の「訂正」現象においても、そのマーカーである「舌打ち音（歯茎吸着音alveolar click）」とともに「ポーズ」が共起しているデータが見られる（cf. 森田2021:112-114）<sup>18</sup>。

今後は、多角的に観察・分析することによって、記述の精度をさらに高めていきたい。

## 【付記】

本調査は国立大学法人山口大学・人一般研究審査の承認（管理番号：2022-014-02，2024年1月26日）を得て実施されたものである。会話調査に御協力いただいたインフォーマントには、心より感謝いたします。

## 【参考文献】

有元光彦（2022）「感動詞の体系—連続的に捉える試み—」『方言の研究』第8巻，日本方言研究会編，ひつじ書房，pp.29-47.

大工原勇人（2018）「フィルター「コー」における心内情報処理」『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』定延利之（編）（2018），ひつじ書房，pp.148-169.

原口庄輔・中村捷・金子義明（編）（2016）『増補版 チョムスキー理論辞典』研究社

甲田直美（2024）「話し言葉における非流暢性と談

話標識」『談話・文章・テキストの一まとまり性』斎藤倫明・修徳健（編）（2024），和泉書院，pp.95-113.

小出慶一（2009）「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究」『日本アジア研究』6，埼玉大学大学院文化科学研究科，pp.1-37.

丸山岳彦（2008）『『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析』『日本語文法』8（2），日本語文法学会，pp.121-139.

森田美里（2021）『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』くろしお出版

Nakatani, C. & Hirschberg, J. (1993) A Speech-first Model for Repair Detection and Correction, *Proceedings of the 31st Annual Meeting of ACL*, Association for Computational Linguistics, pp.46-53.

NGUYEN THI HA (2025) 『日本語・ベトナム語の自然会話における「引き継ぎ」に関する研究』山口大学大学院東アジア研究科博士学位論文

劉伝霞・有元光彦 (2022) 「日本語会話の二連鎖感動詞類に関する予備的考察」『感動詞研究の展開』友定賢治 (編), ひつじ書房, pp.145-164.

Sacks, H. Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language* 50(4), Linguistic Society of America, pp.696-735. (「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』H. サックス/E.A. シェグロフ/G. ジェファソン (西阪仰 (訳)) (2010), 世界思想社, pp.5-153.)

定延利之 (2019) 『文節の文法』大修館書店

定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・船橋瑞貴・林良子 (2024) 「非流暢性の目録」『流暢性と非流暢性』定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・船橋瑞貴・林良子・モクタリ明子 (編) (2024), ひつじ書房, pp.511-524.

Schegloff, E.A. (2007) *Sequence Organization: A Primer in Conversation Analysis I*, Cambridge University Press.

Schegloff, E.A, Jefferson, G., & Sacks H. (1977) The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation, *Language* 53 (2), Linguistic Society of America, pp.361-382.

シェグロフ・ジェファソン・サックス (西阪仰 (訳)) (2010) 「会話における修復の組織—自己訂正の優先性」『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』H. サックス/E.A. シェグロフ/G. ジェファソン (西阪仰 (訳)) (2010), 世界思想社, pp.155-246.

杉崎美生 (2020) 「発話修復場面における「なんか」の使用について」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』26, 日本女子大学, pp.19-35.

高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』ひつじ書房

田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』34 (11), 大修館書店, pp.14-21.

若松美記子・細田由利 (2003) 「相互行為・文法・予測可能性—「ていうか」の分析を例にして—」『語用論研究』第5号, 日本語用論学会,

pp.31-43.

山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

吉田奈央・丸山岳彦 (2024) 「言い直し表現のアンテーション—その基準と方法論の検討—」『流暢性と非流暢性』定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・船橋瑞貴・林良子・モクタリ明子 (編) (2024), ひつじ書房, pp.105-124.

熊磊 (2016) 『日本語の談話における初頭性及び末尾性に関する研究』山口大学大学院東アジア研究科博士学位論文

## 【注】

- <sup>1</sup> 非流暢区間を丸山 (2008 : 125) では「中断部」, 吉田・丸山 (2024 : 108) では「中断区間」と呼んでいる。本稿では「非流暢区間」という用語を用いる。
- <sup>2</sup> 高木・細田・森田 (2016 : 186-187) によると, 修復連鎖には「自己開始自己修復」「自己開始他者修復」「他者開始自己修復」「他者開始他者修復」の4種類がある。
- <sup>3</sup> 記号 . (ピリオド) は, 語尾の音調が下がっている場合を表す。
- <sup>4</sup> 記号 : は音の引き伸ばし, 記号 ( . ) は0.2秒以下の短い間, 記号 = は発話の密着をそれぞれ表す。
- <sup>5</sup> 「話者交替」という用語は, 「話者交代」「ターン交替」「ターンテイキング (turn-taking)」と呼ばれることもあるが, 本稿では「話者交替」という用語を用いる。
- <sup>6</sup> 下線部は, 「なんか」と共起する表現を示す。
- <sup>7</sup> 本稿では, 山根 (2002), 小出 (2009), 甲田 (2024) などに従って, 「こう」をフィラーと捉えておく。ただし, 「こう」についての詳細な研究は, 管見の限り大工原 (2018) しかなく, 今後のさらなる検討が必要である。なお, 大工原 (2018) の定義に従うと, ここでの「こう」はフィラーであると考えられる。
- <sup>8</sup> 田窪 (2005 : 16-18) では, 「あれ」「まあ」などのように語彙的な要素から転用されたものを「語彙的感動詞」と呼んでいる。この転用はおおそく文法化 (grammaticalization) の一種で, 指示詞などの語彙とフィラーとの間には連続性があると考えられるが, フィラーの実態が明らかになっていないため, 今後の課題とするしかない。
- <sup>9</sup> 若松・細田 (2003 : 36) では, 婉曲的な修復のことを「弱い修復 (mitigated repair)」と呼んでいるが, 厳密な定義はなされていない。

- <sup>10</sup> 発話04387の「そーーーれ」の「ーーー」は、およそ4秒の長さの長音である。
- <sup>11</sup> 空 (empty) の要素は、生成文法理論 (Generative Grammatical Theory) においても理論的に仮定されている。例えば、音声内容を持たない範疇としてEmpty category (空範疇) を仮定し、その生起に強い条件を課している。なぜわざわざ空の要素を理論的に仮定するのかについては、次のような記述が見られる。「空範疇の存在とその特徴の研究は、普遍文法の研究において非常に重要な意味を持っている。すなわち、言語習得の面から見た場合、空範疇は音声内容を持たないので、その特徴は言語資料から直接知ることではできない。したがって、空範疇の存在および特徴は、人間の生得的な言語機能に備わる普遍文法の反映である可能性があり、その研究は普遍文法に関して重要な洞察を与えるものと考えられている。」(原口・中村・金子 (編) 2016: 168)。NGUYEN THI HA (2025) では、ベトナム語にも日本語と同じ対称性があることが記述されていることから、言語普遍性 (language-universality) の観点からの研究が必要であろう。
- <sup>12</sup> 語彙化とは、有元 (2022: 31) によると、「語彙 (レキシコン) として心的辞書に登録されている度合い」のことである。有元 (2022: 34) では、感動詞類に「語彙化スケール」を仮定している。本稿でも同様の考え方を適用する。
- <sup>13</sup> 逆のことを考えると、「2つのポーズ間に生起する要素は感動詞類である」ということになり、要素の生起位置が感動詞類であるか否かの試金石になるかもしれない。ただし、この考えに従うと、フィラー「こう」は2つのポーズ間の外に位置するため、感動詞類ではないことになってしまう。今後の課題である。
- <sup>14</sup> 熊 (2016) では、文の命題を中心とした、文の初頭に現れる言語行動 (初頭行動) と文の末尾に現れる言語行動 (末尾行動) とに鏡像関係があることが記述されている。このことを会話に適用すると、確かに話者交替場所に対称性が見出せるが、対象が感動詞類だけではないため、感動詞類に対称性があるかどうかは不明である。また、甲田 (2024) では対称性という用語が出てくるが、非流暢区間の内部のことではなく、修復対象区間 (修復対象) と修復区間 (修復部分) に生起する要素が同一あるいは類似のものであることを表している。なお、言語形式である談話標識のみを非流暢区間とし、そこに生起しているポーズや笑いなどは非流暢区間とは捉えていないようである。
- <sup>15</sup> (39) において、記号「感」は感動詞類、「(hh)」は笑いをそれぞれ表す。
- <sup>16</sup> TRPとは「順番の移行に適切な場所 (transition relevance place)」のことである (cf. Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)。現時点では、話者交替場所と同じものと捉えておけるが、今後の検討は必要である。
- <sup>17</sup> この仮説は、次のような発話行動にも適用できるかもしれない。例えば、ある話者がしゃべっている途中で、他の人が言ったことをリアルに伝えるために、あたかもその人が実際にしゃべっているかのように、その人の声色を真似て発話することがある。その話者自身の発話から真似発話に移ることは、話者交替が起こっていると捉えられないだろうか。この移行時に感動詞類などが生起するかどうかは不明であるが、もしそこに感動詞類などの対称性が見出されるのであれば、まさに擬似的な話者交替場所ということになる。また、4.4で取り上げた「ていうか」の文法的意味について、若松・細田 (2003: 32) は「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが行ったように聞こえさせながら、なおかつ、その後にもう一つの可能性となる要素が続く」と述べている。この記述からは話者交替を想起させられるが、単に文法的意味として捉えている点で、本稿の仮説とは根本的に異なるものである。しかし、話者の観点を記述に取り入れた点では注目に値するものであり、今後の検討が必要である。
- <sup>18</sup> ここでのポーズとは、「0.1秒前後の、わずかな無音のポーズ」を表す (森田2021: 30)。